

平安貴族の住まいと暮らし — 「齋宮」邸 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

平安京と伊勢神宮 2000年、西大路御池交差点の北西に位置する京都市立西京高等学校（旧京都市立西京商業高等学校）の敷地北半部から平安時代の庭園をともなう1町規模の邸宅が発見されました。1町内のほぼ全容が明らかになった遺跡は、平安京跡では初めてのことでした。この場所は、平安京内の位置で示せば右京三条二坊十六町にあたります。

ところで2013年10月、伊勢神宮では20年に一度の式年遷宮が行なわれましたが、実は、この伊勢神宮と密接な関わりを持つ遺跡が敷地北半部のグラウンドに眠っていたのです。

発掘調査では、「齋宮」・「齋舎所」・「齋雑所」などと記された墨書土器が出土し、十六町の邸宅が「齋宮」に関わる邸宅であったことがわかり、多くの関心が寄せられました。この調査成果は、調査担当者らによって分析・研究され報告書にまとめられています。

式年遷宮の行なわれたこの年、再度、報告書を基にこの遺跡を訪ねてみましょう。

「齋宮」と齋王 「齋宮」とは、齋王が居住した建物（現在の三重県多気郡明和町に所在）のことで、さらには齋王自身をも表す言葉です。齋王には、天皇の身代わりとして伊勢神宮の内宮に仕える天皇



「齋宮」邸出土の墨書土器

の皇女ないし近親の女性^{ぼくじょう}が卜定（占い）によって選ばれました。齋王は神に仕える役割りを担うわけですから、潔斎^{けつさい}して身を清めなければなりません。まず、それまで住んでいた齋王の家から初齋院^{しよさいいん}（平安宮内に設けられた便宜な潔斎所）に移り、その後、京外の野宮^{ののみや}でも潔斎を重ね、伊勢齋宮へ参入します。

平安京遷都を果たした桓武天皇も2人の皇女を伊勢齋宮に送っています。そのうちの布勢内親王^{ふせないしんのう}は、宮中の初齋院で潔斎の日々を過ごし、葛野川^{みぞぎ}で禊をして野宮に入っています。

齋王家 「齋宮」の墨書土器が出土した十六町の邸宅は、平安京右京に所在します。したがって、この十六町は、初齋院ではなく、野

宮でもなく、卜定された齋王が初齋院に移るまでの期間に居住した齋王家と考えられます。また、「齋舎所」や「齋雑所」の墨書土器から、その間の齋王家にも齋王に仕える官人や雑色人などの存在が指摘されます。これら墨書土器を含め、必要な器物は、齋王家に納められたのでしょうか。

発掘調査で明らかとなった齋王家の邸宅内部は、あらかじめ齋王のために造作された^{みまが}と見紛うほど整い、ここが京中でなければ、初齋院後に移る野宮が思い浮ぶほどです。十六町の南半部は官人や雑色人の所属する舎屋、北西部は池と周囲に建物が配置され、まさに齋王が拝殿を設け潔齋を行ないつつ生活する空間を彷彿とさせます。池は、絶えず泉などから湧水の供給を受け、常に水が入れ替わる清浄な状態に保たれていたことが明らかにされています。建物から眺望できる周囲の山々の景観とともに、伊勢齋王としての潔齋の日々の合間、ひとときの安らぎを覚えたのかも知れません。

齋王家のその後 齋王が伊勢神宮へ参入した後も、齋王家は存続したのでしょうか。また、伊勢齋王の任を解かれた退下後は、元の邸宅で過ごしたのでしょうか。

この遺跡は、出土遺物の年代から9世紀後半に造営され、その後、数十年に及ぶ期間存続したことがうかがわれます。齋王卜定の開始から伊勢齋宮退下後も齋王家の邸宅が存続し続けたことを物語っているのかも知れません。

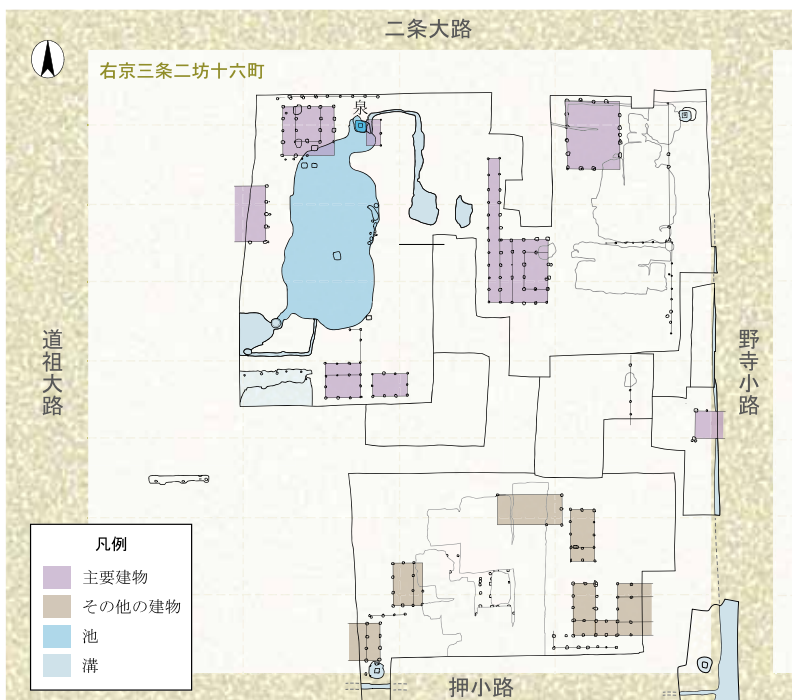
(辻 裕司)



「齋宮」邸の庭園（北から）



「齋宮」邸の庭園 池の泉（北西から）



「齋宮」邸復元図